

Title	『ジャックマン大通り』、偽名の楽しみ
Sub Title	"Boulevard Jacqumain", le plaisir du pseudonyme
Author	佐野, 有沙(Sano, Arisa)
Publisher	慶應義塾大学フランス文学研究室
Publication year	2019
Jtitle	Cahiers d'études françaises Université Keio (慶應義塾大学フランス文学研究室紀要). Vol.24, (2019.) ,p.1- 16
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11413507-20191205-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『ジャックマン大通り』、偽名の楽しみ¹

佐野 有沙

アンドレ・ブルトンがパリで『野の鍵』を刊行したのと同年、ベルギー・ブリュッセルのシュルレアリスムグループでは奇妙な小説が日の目を見た。タイトルは『ジャックマン大通り²』。グループ中唯一女性の書き手であったイレヌ・アモワール（1906-1994）を著者とするこの曲がりなりにも一応の推理小説が、実際は夫で中心メンバーの一人だった詩人ルイ・スキュトネール（1905-1987）の手になる作であることは、首領ポール・ヌジェの著作を刊行したことで名高い作家マルセル・マリエンの証言³や、執筆時期に交わされた夫婦の未刊行の書簡にもとづくカトリーヌ・ダームスの研究⁴によってほぼ確実視されている。この詐称については、署名や作者といった概念を無効化しようとしたグループの理念の体现であるということがダームスによって穏当に論じられているが、かたや作

¹ 本稿で引用した未邦訳作品ならびに論文の翻訳は筆者による。

² Irène Hamoir, *Boulevard Jacqmain*, Bruxelles, Éditions des Artistes, coll. « Terres et Visages », 1953 ; réédition, Bruxelles, Didier Devillez, 1996.

³ Marcel Mariën, « Les Vertus sataniques », *Le Moment Venu*, Bruxelles, Les Lèvres Nues, n° 2, 1989, pp. 8-9.

⁴ Catherine Daems, « Scutenaire-Hamoir et la littérature », *Irène, Scut, Magritte and C : ce qui est attirant est beau*, Bruxelles, Musées royaux des Beaux-Arts de Belgique, 1996, pp. 127-135. スキュトネールとアモワールの足跡、および夫婦が所有していた膨大な量のルネ・マグリット作品に焦点をあてた初の展覧会のカタログに収められている。スキュトネールについて 3 本、アモワールについて 2 本の論文、各々の詳細な年譜、交友関係録など充実した内容をもつ本カタログは、以降 *ISMIC* と略す。

品の内容面——冒頭ポール・ヌギエの死から始まって人物の多くがブリュッセルグループメンバーの名前の明らかなもじりで登場すること、この命名の遊戯がスキュトネールの他作品にも特徴的に見出されること、またその争点等——の詳細な研究は、ポール・アロンらが示唆するように⁵いまだなされていない。レイモン・クノーの『オディール』ともルイ・アラゴンの『アニセまたはパノラマ』とも異なるこの人を食った「モデル小説」を、本稿では人物と与えられた役柄のずれから生じるおかしみの効果に着目しながら試読する。

内容紹介と初版出版経緯

B6 判で 180 ページ、全 17 章からなる物語の舞台は、1930 年代⁶ブリュッセルの暗黒街。エドゥアール・マサンスの経営するバーで、街の顔役ポール・ヌギエが何者かに射殺される。悲しみに暮れるヌギエの恋人リナは復讐を誓い、娼婦仲間のマルト、クレピュ、ベルジュール、ヌギエの友人だった競馬狂のグリット、生き字引のムッシュ・マルセル、青二才の弁護士ブリッジ、界隈の重鎮サミュエル・リュスコとその愛人ファニーといった面々に囲まれながら傷をいやしていく。なかでもグループきっての色男ジャックとの恋は、リナに古い恋慕を忘れさせることになる。マルセルの旧友・ちびのエヴラールが経営するバーへの押込み強盗と、それに伴うジャックら一味の逮捕劇と裁判シーン、女の所有権をめぐる仲間内の報復劇、リナの梅毒罹患騒動などをへて、リュスコからの助言でヌギエ殺しの犯人が他でもないジャックであると悟ったリナは、ヌギエがされたのと同じ方法——背中に 3 発の銃弾を撃ち込む——でジャックへの報復を果たす。

⁵ Paul Aron, Jean-Pierre Bertrand, *Anthologie du surréalisme belge*, Bruxelles, Communauté française de Belgique, coll. « Espace Nord », 2015, p. 108.

⁶ はっきりとは特定されていないが、第 14 章で作中人物のひとりがジョルジュ・シムノンのメグレ警視シリーズ『運河の殺人』（1931）を最新刊として読む場面がある。

作品の内容と当時の書評を検討する前に、初版の出版経緯を整理しておこう⁷。『ジャックマン大通り』の執筆時期は 1937 年から 39 年、スキュトネール 32 歳から 34 歳の時期に遡る。何らかの作品の出版をしばしば強い口調で命じていた妻イレヌ・アモワールに⁸「匿名」の条件でならんと応じたスキュトネールは、この推理小説（と同時に執筆していた短編小説集『地獄の桶』）を「ぼくらの作品」「ぼくらの書き物の資本」と呼んで、タイピストの仕事の関係でオランダに出張中だった妻にかいがいしく進捗状況を報告している。匿名性を担保する手法としてなぜイレヌ・アモワールを作者とすることを選んだのか、それはどちらからの提案だったのか、その辺りは定かではないが⁹、いずれにせよすでに 1939 年以前にガストン・ガリマールの手に渡っていた原稿は、40 年、戦禍を逃れた作家や知識人のサロンと化していた南仏カルカソンヌのジョー・ブスケ宅で、ガリマールの興味を引いていることが直接アモワールへ伝えられる¹⁰。その後複

⁷ 注 3 の論文および以下のイレヌ・アモワールの年譜を参照した。Virginie Devillez et Micheline Colin ed., « Irène Hamoir Chronologie », *ISMC*, pp. 45-59.

⁸ 1926 年 21 歳でブリュッセルのシュルレアリスムグループに参加、そこで出会ったアモワールと 30 年に結婚したスキュトネールは、29 年にブリュッセル自由大学の法学博士号を取得、弁護士会に登録するもうだつが上らず、かといってグループの行動指針——「手稿から名前を消す」——への共感ゆえに作品を出版するはずもなく、夫の稼ぎ口は長年アモワールの頭痛の種だった（1941 年に内務省役員の職を得てからは、退職まで安泰の身となる）。

⁹ ダームスが引用した夫婦の書簡からは、アモワールがスキュトネール作品の「助言者」および「校閲者」として果たした役割が小さくないことが伺える。これを踏まえて『地獄の桶』および『ジャックマン大通り』を「4 つの手になる仕事」とする立場もある。cf. José Vovelle, « Des femmes et du surréalisme en Belgique », *Europe*, n° 912, Paris, avril 2005, p. 173.

¹⁰ 上記年譜の表記を信じれば、ガリマールが「作者」として対峙したのはアモワールである。ガリマールが夫婦の詐称行為を了承したうえで出版に乗り気だったのか、むしろそれがプラス要因だったのか、といった辺りはわからない。

数の出版社の関心を引き、45 年の夫婦からマルセル・マリエン宛ての手紙では、前年にやはりアモワール名義で出版されていた短編小説集『地獄の桶』のカバーそでにあるような作者紹介を出版社が要望していること、スキュトネールがメリメの『カルメン』風の世界であると匂わせたがっていること¹¹、「夜の仲間たち」なるうたい文句が考えられていることなどが記されている。ようやく出版に向けた最終準備が整うのは執筆から 14 年後の 1953 年、愛書家のジョルジュ・ウユーが 1935 年に創設し、ベルギーで戦前・戦後を生き延びた数少ない独立系出版社であるアーティスト社¹²が版元に決まる。同年 6 月 5 日に刊行された完成本のカバーには、人気のない濡れた街路にキャデラックらしき高級車が佇む夜景のモノクロ写真が、帯には「『とある世界』の小説」の文字、扉の後には「この物語はフィクションである」の注意書き¹³、カバーそではどこか爛々とした表情で左斜め上を見据えるイレヌ・アモワールのバストアップ写真と、彼女の経歴を紹介する短文¹⁴が寄せられた。無事刊行の朗報をバカンス先のニースで受け取っていた夫妻は、マルセル・マリエン宛の手紙で「ニースを半分買い取って、あそこにいつまでも居座ることができるくらい作品が成功す

¹¹ 女（リナ）への恋情で身を破滅させる男（ジャック）の物語という側面を強調させたかったか。

¹² 以下に詳しい。Pascal Durand, Tanguy Habrand, *Histoire de l'édition en Belgique : XVI^e - XXI^e siècle*, Bruxelles, Les Impressions Nouvelles, coll. « Réflexions faites », 2018, pp. 236-237.

¹³ 正確には「この物語の展開と人物は架空のものである。生者にせよ死者にせよ、同時代人とのあらゆる類似はしたがって純然たる偶然にすぎない」。

¹⁴ 自転車アクロバットを目玉にしたサーカス団「ザ・ノワゼット」の団長だった祖父の影響でベルギーサーカスクラブの特派員を務めたこと、生活上の必要から商学とジャーナリズムを学んだこと、（とりわけ南の国々への）旅行好きであること、これまでに短編小説集、詩集、戯曲を発表していること、こうしたことから未知の景色や人々、多種多様な世界を発見するのを好み、森羅万象に宿るポエジーにその指でたえず触れようとしている云々。

ることを願っているわ（いるよ）¹⁵」と冗談めかしているが、3 か月後に日刊紙『ル・ソワール』の文芸欄にごく小さな囲み記事で掲載された（もちろんアモワールを作者とする）率直な書評¹⁶を、ゴーストライターであるスキュトネールがどう受け止めたかはわからない。批評への無関心さ、文壇的榮譽への無頓着さ、ディレクタント的性格はスキュトネールを特徴づける大きな要素だが¹⁷、一方で自身に関わる新聞記事の切り抜きを「恥や

¹⁵ Louis Scutenaire & Irène Hamoir ou Irine, *Correspondance à Marcel Mariën* (suite 5) (lettre du 15 juin 1953), *La Diversion*, Bruxelles, Les Lèvres Nues, n° 14, 1990, p. 8. 筆者未確認。主語は「Nous」でどちらの筆跡かはわからない。とはいえ注 13 でも触れた南方への愛着、「ニースの半分を買って永住したい」という小市民的な願望、作品を出版して金銭を得るという発想（「（グループの理念に深く共感しているスキュトネールとは対照的にアモワールは）書くという行為は本腰を入れて取り組む——場合によってはそこから利益を引き出す——労苦と見なしている」Daems, p. 131）、そもそもこの地にはアモワールの親族が住んでいること等から、アモワールの手によるという印象が強い。

¹⁶ D.A., « *Boulevard Jacqmain d'Irène Hamoir* », *Le Soir*, 5 septembre 1953, p. 7. 初版出版からちょうど 3 か月後に掲載された、筆者が確認した限りもっとも初期の作品評。書き手の記者「D.A.」については未詳。ジャン・ダニエル、ジョゼフ・マジョー、マルセル・ジュアンドーといった他に批評を担当した作家名をたどる限り、（アモワール含め）無名に近い作家の専門家だったことがわかる。

¹⁷ もっとも顕著なのは、備忘録『わが落書き』*Mes Inscriptions* 出版をめぐるエピソードだろう。ブリュッセルグループと懇意だったポール・エリュアールの働きかけで第 1 巻が 1945 年ガリマール社から刊行に至り、以後スキュトネールの代表作となる本作は、第 2 巻の記述の一部がガストン・ガリマールから「下品」「平凡」「ベルギー風すぎる」などとして削除を依頼されると、スキュトネールが出版自体を拒否、折り合いがつかず結局同社での企画は頓挫したという経緯をもつ（その後死に至るまで書き続けられ、グループの一世代後の作家トム・ギュットの協力などを得て第 5 巻まで刊行される）。この際の事情はアラン・ドゥロノワとの対談に詳しい。「Louis Scutenaire : entretien avec Alain Delaunois », *Plein Chant* [numéro consacré à Louis Scutenaire ; dossier réuni et

虚栄からではなく嘲諷から¹⁸⁾」保存していたという証言もある。『わが落書き』第1巻で受けた酷評——「1930年のシュルレアリスムの優等生」「今日では汲みつくされたテーマの変奏¹⁹⁾」——を大して気にとめず、まったく手法を変えずに第2巻を用意、それが出版社の意向で通らないとなると出版自体を拒否するスキュトネールのことであるから、そもそもが妻にせがまれたかたちで書いた『ジャックマン大通り』に関する書評も、他人事のように受け止めつつ、ただ作者名の韜晦にもあだ名のトリックにも気づくそぶりのない批評家を尻目にほくそ笑んでいた、というあたりが真に近いのではないだろうか。

不出来な小説

作品のあらすじは先に述べたとおりだが、「これは小説なのか」と戸惑いを口にし「次作に期待する²⁰⁾」と遠回しに作品の不首尾を結論づける『ル・ソワール』の書評がもっともであることを次に見ていく。

まず推理小説としての完成度が限りなく低い。この種の物語の愛好家心をくすぐるのに十分な出だし——唐突な殺人事件と「手袋をはめた片手」

présenté par Alain Delaunois], Bassac, Plein Chant, n° 33-34, novembre 1986-janvier 1987, pp. 36-42. またスキュトネールのディレクタントイスムについてはフィリップ・モレが以下の論文前半で詳述している。Philippe Moret, « Louis Scutenaire et l'écriture de l'inscription », *Tradition et modernité de l'aphorisme : Cioran, Reverdy, Scutenaire, Jourdan, Chazal*, Genève, Droz, 1997, pp. 293-325.

¹⁸⁾ Alain Delaunois « Scutenaire d'Ollignies », *ISMC*, p. 83.

¹⁹⁾ Louis Parrot, « Des auteurs difficiles », *Les Lettres françaises*, Paris, 7 juillet 1945.

²⁰⁾ 正確には「次作でイレヌ・アモワールが、今作に欠けているものを埋めてくれることに疑いはない。彼女の才能が約束してくれている」。作者がルイ・パロから酷評された『わが落書き』の著者であるルイ・スキュトネールであったらどうなっていたか、(スキュトネールに比べれば出版作品数も少なくまた女性である)アモワールであることで何らかの手加減がないか、といったあたりの疑問は尽きない。

だけしか手掛かりを残さない犯人——とは裏腹に、犯人解明までの道筋とその正体には何ら意外性がない。殺人犯は当初から不審な動きをし（犯行当日に現場を徘徊、ヌギエの葬儀に不参加）、動機も十分だった（リナへの激しい恋心とヌギエへの強烈な嫉妬心）ジャックということであっけなく物語の幕は閉じる。

また『ル・ソワール』書評も指摘する、娼婦やならず者といった場末の人間の人情を描いたフランシス・カルコ風の風俗小説という側面もふるわない。200 ページ弱の物語で登場人物が名前が出てくるだけでも 40 人を超えることから、個々の心理の深掘りはなきに等しく、たまに展開されるとしても本筋とはなんら関係がない（第 7 章のブリッジとクレピュのやや入り組んだ男女の模様）。ラストもジャックの遺体遺棄後、軽口をたたく者やむせび泣く者がいる中で、ムッシュ・マルセルが月を見上げながら芝居がかったセリフを吐くというこの上なく陳腐な結末を迎える。（モンマルトルほどの歓楽街ではなかったブリュッセルを舞台とすることで）「現実を少しばかり『豊かに』」しすぎていて、「真に価値ある小説の証しである人間味」に欠くとする記者の指摘は、妥当としか言えない。

さらにルイ・スキュトネールの実人生や趣味の反映であるとしか言いようがない要素が、物語の締まりのなさとりとめのなさに拍車をかけている。一章分丸ごと割かれた裁判シーン²¹（第 12 章）や、登場人物のものとも作者のものともつかないボノ団、ラスネール、マンドラン、カルトゥーシュら犯罪者や盗賊への賛美²²（第 13 章）がそれである。

²¹ 注 8 および以下のスキュトネール年譜を参照。Virginie Devillez et Micheline Colin ed., « Louis Scutenaire Chronologie », ISMC, pp. 85-102. とりわけ 1931 年（26 歳）の箇所に、弁護士会での研修の経験が精神病者、ごろつき、詐欺師への興味を駆り立て、炭鉱町オリニーで過ごした少年時代から抱いていたボノ団やみ出し者への憧憬を強めたとある。また 1924 年から生涯住み続けたブリュッセル、リュゼルヌ通り 20 番地の住居の向かいには精神病院があった。

²² 前注を参照。なかでも 1911 - 12 年（スキュトネール 6 - 8 歳）にパリを震撼

以後当然のように批評家から黙殺された本作は、しかし 1987 年のグザヴィエ・カノンの作品評²³をはじめとして、若干であるがその命名の遊戯に気づき、関心をもつものの存在が増えてくる。スキュトネールが忍ばせた遊戯が完全に表面化したのは初版からじつに 43 年後の 1996 年、『ヴァリエテ』『ドキュマン 34』等ベルギーシュルレアリスム関連雑誌のファクシミリ版刊行で知られるディディエ・ドゥヴィエ社が、『ジャックマン大通り』再版を機に、巻頭に登場人物と現実の人物との対照表を付したのだ。

1996 年版のリスト

リストを作成した人物の名前、参照した資料や証言などは明らかになっていないが、アモワール年譜によればリスト挿入はドゥヴィエ社の意向である²⁴。本稿でもたびたび引用しているスキュトネール夫妻の展覧会カタログにはドゥヴィエ社も大きく関わっていたことから（年譜の編纂者のひとりはディディエ・ドゥヴィエの親類と思われるヴィルジニー・ドゥヴィエ）、どちらが先かは不明だが、同年に刊行された 1996 年の再版企画とは深いつながりがあったと思われる。そうした経緯を踏まえて文献考証的な信憑性が少なからずあるこのリストには、19 人の登場人物とそのモデルが明示されるとともに、主人公のリナとジャック、犯人解明に重要な役割

させたジュール・ボノを中心とする銀行強盗・殺人集団への偶像崇拜に近い記述はおびただしい。もっとも知られているのは『わが落書き』の次の一文だろう。「わたしの胸を打つ唯一の叙事詩はボノ団によるものだ」。Louis Scutenaire, *Mes Inscriptions*, Bruxelles, Labor, coll. « Espace Nord », 1990, p. 40.

²³ Xavier Canonne, « Irène Hamoir », *Lectures : la revue des bibliothèques*, Liège, Centre de lecture publique de la communauté française, n° 36, mars-avril 1987, p. 9-10.

「（グループのメンバーがギャングに扮しているのが楽しいあまり）あらすじを忘れてしまう」として、作品を読み解くカギがストーリーではなく命名の遊戯にあることを示唆している。

²⁴ Devillez et Colin, *ISMC*, p. 57.

を果たすサミュエル・リュスコを含む 8 人の人物に関しては「『暗黒街』の人々」（＝完全に架空の人物）であるということが付記されている。本リストをひとまず信じることにして、ここではブリュッセルグループと関係の深かった人物に絞って登場人物とそのモデルの種明かしをしよう²⁵。

冒頭からいきなり無残な死を迎えるポール・ヌギエ Paul Nougier は、グループの理論的支柱で詩人のポール・ヌジェ Paul Nougé。「団子鼻」「大きな黒い眼」「日焼けした浅黒い肌」「反抗的な黒髪」（24）という描写は、実際のヌジェの身体的特徴と完全に一致する。ヌギエの二つ名「シャラントのポロ」（10）はヌジェの父親の出身地への目配せだろう。第 4 章のヌギエの遺体埋葬シーンでは、彼の父親がこの郷里シャラントの地からはるばるやってくるが、「丸刈りで農民風の顔つき」「たっぷりした口ひげ」「熟れていない二粒のカシスの実のようにつぶらな瞳」（34 - 35）といった描写も、写真で確認できるポール・ヌジェの父親の人相に限りなく近い。

ヌギエが殺された居酒屋〈オスクズ・バー〉の店主ことエドゥアール・マサンス Édouard Massens は、音楽家で美術商の顔もあった E・L・T・メザンス E.L.T. Mesens。実際の愛称だった「ドウドゥ」（9）とバーのなじみ客からも親しみを込めて呼ばれる。

ヌギエ一味のひとりで「いつも馬の問題に憑りつかれている」（29）男・グリット Gritto は、画家のルネ・マグリット René Magritte。競馬好きという設定は、マグリットがシュルレアリスムへ参入する重要な転機となった作品〈失われた騎手〉*Le Jockey perdu*（1926）を念頭に置いてのこと

²⁵ 以下『ジャックマン大通り』初版からの引用ページ数は、丸かつこと数字で示す。また現実のモデルとの相関関係については、以下の資料が参考になった。Olivier Smolders, *Paul Nougé : Écriture et caractère, À l'école de la ruse*, Bruxelles, Éditions Labor, coll. « Archives du futur », 1995 ; Christian Bussy, *Les surréalistes au quotidien : Petits faits vrais*, Bruxelles, Les Impressions Nouvelles, coll. « For intérieur », 2007 ; « Les Amis », *ISMC*, pp. 159-475.

だろうか。ヌギエの埋葬の際、少し離れたところで仲間たちを遠巻きに観察している（34）、第6章の押込み強盗では、ひとり機動隊隊員ではなく監視役を任されるなど、何かと単独行動が目立つ。グループでただひとり世に名を知られ「友人のほとんどから非難の火を浴びていた²⁶」マグリットの一時期を反映しているのとれなくもない。

やはり一味のひとりで「辞書という辞書を知っている」（51）男・ムッシュ・マルセル Monsieur Marcel は、詩人で批評家のマルセル・ルコント Marcel Lecomte。「ムッシュ・マルセル」は、学校教師で生計を立て、「面食らわせるような言葉づかいをし、こけおどしの威厳をもっている²⁷」というルコントに、実際にスキュトネールがつけていたあだ名だった。

一味の強盗にあう哀れな居酒屋店主・ちびのエヴラル le petit Evrard は、おもに美術交渉人として活躍したジェラル・ヴァン・ブリュアーヌ Gérard Van Bruaene。正式なメンバーではなかったものの、ブリュッセルグループのたまり場となっていた居酒屋〈金箔の花〉の店主だったこともあり、スキュトネールらと親密な関係にあった。特徴的な低身長、「丸々とした体」「赤ら顔」「いつも陽気な」（54）といった描写から、現実への参照度の高さがうかがえる。なお被害者として証言台に立つ裁判シーンでは、「マルドロールの不信心な弟子」（112）と自称して演説をぶつ奇態を演じる²⁸。

「少々頭はイカれているが毒気のない青二才弁護士」（49）ブリッジ Bridge は、当のルイ・スキュトネール Louis Scutenaire。ギャング一味と裏

²⁶ Alain Delaunoy « Lecture », Scutenaire, *Mes Inscriptions*, pp. 336-337.

²⁷ Scutenaire, *ibid.*, p. 281.

²⁸ スキュトネールは読める本が一冊しかないとしたらロートレアモンの全集を選ぶとしたあとで、次のように述べている。「だから他人がイジドル・デュカスについて話したり書いたりするのを聞いたり見たりしたくない。ジェラル・ヴァン・ブリュアーヌを除いて」。 *Ibid.*, p. 124.

で繋がる悪徳弁護士であり、家庭を持ちつつ娼婦のクレピュ Crépue（もちろんモデルはイレヌ・アモワール Irène Hamoir）と恋仲になる。

ヌジェとマグリットの妻二人も、それぞれ娼婦として登場している。「青白い顔に、暗いひとみが垂れさがった黒い前髪からのぞく大女」（11）マルト Marthe は、ヌジェの 2 番目の妻マルト・ボーヴォワザン Marthe Beauvoisin。身体描写はモデルそのものであるが、自殺未遂を繰り返して、最終的に精神病院へ収容されてしまう現実のマルトの狂気の部分は、ここでは影を潜めている。また相方を組む情夫はジョビー・オトゥルイ Joby Autrui という名のお調子者である（96 年版リストによればモデルはいない）。マグリットの妻ジョルジュエット Gerogette は「迷信を信じ」（25）少々「お人好しな」（63）娼婦・ベルジェール Bergère に扮している。名前は彼女の旧姓ベルジェ Berger をもじったものだろう。

リストにはなぜか載っていないが、明らかに現実のモデルを参照していると思われる人物もいる。例えば第 13 章に出てくる鼻眼鏡をかけた若者、居酒屋〈タベルヌ・モンダル〉の店主・ちびのマリエン le petit Marien は、名前からしても風貌からしても、ブリュッセルグループ第二世代の中心人物であり、グループの歴史化に重大な痕跡を残した²⁹マルセル・マリエン Marcel Mariën に間違いない。ちびのマリエンの店内の壁には「奇妙な小ぶりの絵が新聞から切り抜いた写真と組み合わせあって」（122）飾られており、特異なコラージュ作家としての一面もあった現実のマルセル・マリエンをあからさまに意識したものだろう。

このように『ジャックマン大通り』には、ブリュッセルグループの主要メンバーが——スキュトネールとの関係の近さに応じてその割かれた記述の分量や役割の大小は異なるものの³⁰——ギャングや娼婦に扮しつつ現実

²⁹ Marcel Mariën, *L'Activité surréaliste en Belgique : 1924-1950*, Bruxelles, Lebeer Hossmann, 1979.

³⁰ 「おやっさん」と慕っていたヌジェ、生涯の友であるマグリット、妻アモワールへの偏重が目立つ。

への参照性を多かれ少なかれ有しながら全員集合している。再版に際して『ル・ソワール』の特別版「MAD」に掲載された書評³¹でピエール・モーリーが示唆するように、「グループ内部の力関係の透写紙として小説を解読する」ことも不可能ではないのかもしれない。つまりある種のモデル小説的読解——冒頭のヌギエ殺害はグループのリーダーとして求心力を失いつつあったヌジェの姿を反映している、先にも触れた単独行動をするグリットと現実のマグリットのグループ内での孤立を関連づけるといった読み——を行うということだ。しかしモーリーの付言を引くまでもなく、「（そうした読みは）著者にあまりにも定まった意図を与える」ことになるだろう。それどころか『ジャックマン大通り』は、そうした生真面目な意図とはかけ離れた、悪戯としか言いようがない細部にあふれている。

果てしない悪戯

ブリュッセルグループのメンバーではないものの、シュルレアリスム関連の人物が他にも不意を突いて現れる。最終章でリナとジャックが訪れる動物園のシーンでは、園長としてイヴ・タンギーYves Tanguy なる人物——もはや名前になんのもじりもない——が登場する。1937年にE・L・T・メザンスがブリュッセルで企画したタンギーを含む3人の画家の展覧会のカタログ序文³²を担当したことをはじめとして、スキュトネールがこのパリグループの画家と交流があったことは知られているが、動物園園長とは何事だろうか。「身なりに頓着はないが物腰たっぷりで気品があり」、「いつも青白い顔をして木のように突っ立って」おり、時代が違えば「ペルー総督かフェラーラ公爵にでもなっていただろう」（175）と描写され

³¹ Pierre Maury, « Boulevard Jacqmain », *MAD* (Magazine des Arts et du Divertissement), *Le Soir*, 24 avril 1996, p. 2.

³² Jean Scutenaire, « Trois fenêtres », *E.L.T. Mesens présente trois peintres surréalistes. René Magritte, Man Ray, Yves Tanguy*, Bruxelles, Palais des Beaux-Arts de Bruxelles, 1937. 当時は本名の「ジャン」を用いていた。

るイヴは、ヌギエやエヴラールに比べて現実との関連性が見えにくい。名前以外でこの人物から画家イヴ・タンギーを連想するのは至難の業だろう。

かたや同時代人ではないが、シュルレアリスム——とりわけブリュッセルグループ——を語るうえで欠かせない存在、ロートレアモンの影もちらついている。ちびのエヴラールが「マルドロールの不信心な弟子」を自称していることはすでに述べたが、第 16 章でサミュエル・リュスコが資金源であるショー経営の手をオランダにまで拡大する件で仲間と商談をしている最中、「巨体の老紳士ドール・ロートレアーマ Dore Lautréaama」(158) がオランダのクラブオーナーとして口の端に上るのだ。飲み屋や食事処の名前もふざけている。〈ブルトン〉亭に〈サン・シモン〉亭(87)、レストラン〈キリコ〉(125) とくる。

悪戯の最たるものはポール・ヌギエの人物造形をめぐるものだろう。冒頭でジャックの 3 発の銃弾に倒れる街の顔役ポール・ヌギエのモデルが、ポール・ヌジェであることは前述した通りだが、第 14 章でヌギエに瓜二つの人物が現れる。正体はリナが梅毒罹患疑惑に際して問診に行く、娼婦仲間から紹介された有能な医師である。「顔の表情を変化させる大きなべっ甲縁の眼鏡」(141) さえなかったら幽霊を見たと思ったというほど、その生き写しのような外見でリナを驚かせるこの医師は、つつがない検査と適切な診断(単なるヘルペスであった)をしてすぐに舞台を去る。この産婦人科医が、瓶底眼鏡がトレードマークで生化学者でもあったヌジェの一面を思わせるということはさておいても、ならず者ヌギエのドッペルゲンガーを突然登場させ、読者を面食らわせようとする著者の意図は明確である。そもそも、ヌジェをめぐる命名の遊戯は冒頭から始まっていた。小説の出だし 3 行目から、ポール・ヌジェ Paul Nougé の明らかな偽名でポール・ヌギエ Paul Nouguier が登場したその 2 ページ後、今度は現実世界ではパートナーのはずのマルト・ボーヴォワザン Marthe Beauvoisin が名前を変えずに登場し(Marthe)、しかし小説の中での彼女のパートナーはジョビー・オトルウイ Joby Autrui——名前に「他人 autrui」という語を含む——であるという。ここにきて『ジャックマン大通り』は、アラゴンの『アニ

せまたはパノラマ』における、「X は W の役を演じる Z に似た Y である³³」式のモデルの混乱をきたす。しかし『アニセ』の主眼と思われるのが、マリー=ポール・ベランジェも指摘するように、そのモデルの攪乱行為がそれ自体であり、あるいはクノーの『オディール』が、「アングラレス」や「サルトン」といった、一見ブルトンやトリスタン・ツァラを微塵も彷彿とさせない偽名を用いながら、そのふるまいや口調によって現実のモデルを喚起するのに対し、『ジャックマン大通り』は、先ほどから例示しているように、与えられた役柄とそのモデルとされる実在の人物のずれから生じる滑稽さに基づく、その偽名の遊戯に特異性がある。「エドゥアール・マサンスの経営するバーでポール・ヌギエが殺される」といった設定に面白がれるのは限定的な読者かもしれないが、そのおかしみはどこから生じるのか、一考の価値はある。

偽名の遊戯の争点

スキュトネールはじつは他作品でも同種の遊戯を行っている。『ジャックマン大通り』より苛烈な命名の悪戯が展開しているのが、類まれなるコラージュ小説『危険な日々、黒い夜³⁴』である。とりわけ中盤の自転車レースの章では、フロイト、ハーマン・メルヴィル、アルフレッド・ジャリ、シャルル・クロ、マックス・エルンスト、エミリー・ブロンテ、レーニン、マルクス、ド・ラクロ、マシュー・グレゴリー・ルイス、アヒム・フォン・アルニム……といった総勢 30 名の競技者が、妨害行為や棄権が相次ぐ激戦を戦い抜いた末に、ポール・ヌジェに優勝の座を譲るという荒唐無稽をきわめる物語が繰り広げられる。

スキュトネールが作品に登場させ、しばしば突拍子もない役柄やシチュ

³³ Marie-Paule Berrnger, « Clés et serrures », *Revue des Sciences Humaines [Réinventer le roman dans les années vingt]*, n° 298, avril-juin 2010, Édité par Myriam Boucharenc, Emmanuel Rubio, Presses Universitaires du Septentrion, p. 122.

³⁴ Louis Scutenaire, *Les Jours dangereux les nuits noires*, Bruxelles, Brassa, 1972.

エーションを与えることで滑稽さを喚起するこれらの人物が、まずみなスキュトネールが愛着をもつ人々であるということが指摘できるだろう。マラーからボノ団にいたる 35 人のポートレイトを貼り合わせたコラージュ作品〈写真立て〉*Le Pêle-Mêle*³⁵でも、『わが落書き』の「愛する物語」「ぼくの映画」等の項目³⁶での長大なリストでも、敬愛するものを分類し列挙するという作業はスキュトネールに特徴的である。古今東西の書物を読破する大の読書家であると同時に、異常な書籍蒐集家であったことも知られている³⁷。したがってこの行為にはまず、自らにとって愛着のあるものを収集し、その総体を提示することによって自分なるものを表現しようとするナルシズムがあるに違いない。しかし『ジャックマン大通り』にイヴ・タンギーが動物園園長として登場したとき、それは単なる自己愛を超えて、「既知」から「未知」が生み出されうることを示唆するような、もしくは無意味であることが意味を持つような、より広い可能性を持った遊戯となる。それがポール・アロンらも示唆するように³⁸マックス・エルンスト的なコラージュの実践に近いものなのか、ピエール・ジュルドが闊達に辿った「不適切であること l'incongru」の概念³⁹が参照できるようなものなのか、今後検討したい。

スキュトネールと反文学的实践

剽窃や模倣といった「反文学」の名のもとに置かれるあらゆる実践、犯

³⁵ Jean Scutenaire, *Le Pêle-Mêle*, Documents 34, Bruxelles, 1934.

³⁶ 『わが落書き』に複数存在する項目については、注 16 のフィリップ・モレの論文に詳しい。

³⁷ Christian Bussy, « La bibliothèque de Louis Scutenaire », *ISMC*, pp. 137-145 に詳しい。

³⁸ Aron et Bertrand, *op.cit.*, p. 108.

³⁹ Pierre Jourde, *Empailler le toréador : L'incongru dans la littérature française de Charles Nodier à Eric Chevillard*, Paris, José Corti, coll. « Les Essais », 1999.

罪者への関心、名を秘することの必要性への理解等を共有しつつ、曇りのない確信と実行に貫かれていたポール・ヌジェ⁴⁰とはやや異なり、スキュトネールには、妻や友人の要求を前に折れていく人の好き⁴¹と、「ただ書きたいから書く」という素人気質⁴²、そうしたスタンスへの開き直りがあった。しかし他のシュルレアリストと同様に全方位的な自由を追求しつつ、生涯スターリン崇拝を手放さなかったこと、真の革命のためには暴力に訴える必要性を強く感じていた節があることなどからも⁴³、その真意はむろん計り知れない。彼の反文学的実践の「動機」のようなもの、またブリュッセルグループの共時的・通時的な戦略とのつながりをここで詳細に検討することはできないが、しかし少なくとも『ジャックマン大通り』や『危険な日々』に関する限り、荒唐無稽なこと——イヴ・タンギーが動物園園長で、フロイトが自転車競技者であるといった——をただ「言いたい」という欲望、それを言うスキュトネールの喜び、楽しみは決して無視できない要素のように思われる。『危険な日々、黒い夜』の荒唐無稽な自転車レースの章は、奇しくも「楽しみ *Le plaisir*」と題されている。

⁴⁰ 詳細は以下に詳しい。宮林寛「『私はひとつの行為である』—ポール・ヌジェ試論（その一）—」、慶應義塾大学日吉紀要、フランス語フランス文学、第52号（2011年3月）、129 - 166 頁。

⁴¹ 自他ともに認めるスキュトネールの人柄の好き、温厚な性格については、数々の証言がある。1936年の音楽家アンドレ・スーリの除名騒動——スーリがパレ・デ・ボザール建設を主導した資産家ヘンリー・ル・ブフをたたえるミサを行ったことに端を発する——の際、署名を拒否した数少ないメンバーのひとりであること、ブリュッセルグループにおけるサルヴァドール・ダリにも似た境遇にあったマグリットの生涯の友であり続けたこと、などがしばしば引かれるエピソードである。

⁴² 注16を参照。

⁴³ 以下に詳しい。Raoul Vaneigem, « L'homme contre l'humanisme », *Louis Scutenaire*, Paris, Seghers, coll. « Poètes d'aujourd'hui », 1991, pp. 59-64.